

未来を拓く子どもを育成する 総合的な学習の時間における授業づくり研究

黒瀬由姫香^{*1}・久保田大貴^{*2}・藤上 真弓

Study on Lesson Planning for Developing children who will shape the future
in “the Period for Integrated Studies”

KUROSE Yukika^{*1}, KUBOTA Daiki^{*2}, FUJIKAMI Mayumi

(Received September 30, 2025)

キーワード：地域への愛着、未来を拓く資質・能力、推し活

はじめに

「令和6年度全国学力・学習状況調査」における質問紙調査における「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」という問いと、「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」の問いに対する回答をクロス集計すると、相関があることが明らかになっている（文部科学省・国立教育政策研究所、2024、p.46）。ここで着目したいのは、「自分で」という言葉である。つまり、探究の過程を自ら推し進める子ども主体の総合的な学習の時間を経験している子どもほど、地域や社会をよりよくしようとする意識が高いという結果となっているということである。そこで、本研究では、子どもたちが、地域社会の担い手となり、自分や社会の未来を拓いていくためには、子どもたちを突き動かす情意面に着目していく必要があると考えた。また、総合的な学習の時間は、「本物の社会的実践に子どもが当事者として参画」（奈須、2017、p.22）し、応答責任を果たすために必要な資質・能力を子どもたちに身に付けていく時間であるため、子どもが一人で、かつ、多様な他者と協働的に探究するために獲得する必要がある資質・能力を具体的に与える必要があると考えた。

1. 問題意識と研究の目的

本研究においては、未来を拓くために必要な資質・能力を具体化し、それらを身に付けながら、今後地域のために動き出す原動力となる地域への愛着を深めていく単元を開発し、単元の過程で行った手立てが有効であったか把握することを目的とした。

これからの予測困難な時代を生きていく子どもたちにとって、多様な他者と協働することや、目標をもって最後まであきらめない粘り強さや強い意志は必要不可欠だと考える。実際に、総合的な学習の時間に限らず、学校現場では子どもたちが他者と協働しながら課題解決を行っている場面にふれてきた。総合的な学習の時間においては、地域の課題を解決するために協働する場面が設定される。一人ひとりが同じ方向を向いて、同じ熱量で課題解決のために動き出すことは難しいことかもしれないが、教師の何らかの手立てによって、少しでも一人ひとりが自分ごととして課題と向き合う姿を生み出したいと考えた。そのためには、自分とのつながりがある探究課題であるということを実感させていく必要があるのではないだろうか。そうすることで、自らの力で自分や地域の未来を拓いていこうとする子どもの姿を生み出すことができるのではないかと考えた。

そのような授業づくりをするためには、まずは、子どもたちが自分の住む地域に愛着をもつことが大切で

*1 山口県周南市立富田西小学校 *2 山口大学教育学部附属山口小学校

あると考えた。そのような学びを保障することで、子どもたちは、地域との関わりを増やそうとしたり、大人になった時にも何らかの形で地域と関わりたいという思いをもったりすることにつながるのではないだろうか。つまり、どこに暮らしていようと、自分が幼少期に育った地域が心のふるさととなり、その地域の「推し活」ができるような人材を育成できるのではないだろうか。

木村（2009）や藤上（2008）の先行研究においても、幼児期・生活科・総合的な学習の時間のカリキュラム・マネジメントでは、「in・about・for」の段階を踏んでいく必要があると述べられている（木村、2009、pp.144-146）（藤上、2008、p.92）。これらの先行研究には、子どもたちが「地域のために」動き出すためには、地域の中で人・もの・こととの関わりを深め、思いや願いを醸成するとともに、地域について自分なりの概念を形成しながら、愛着を深めていく必要があることについて述べられている。そのため、本研究では、地域のために動き出すために必要な思いや願いの醸成、概念形成に着目していきたい。

図1は、「for」に向かうまでの流れを整理したものである。子どもたちが未来を拓くためには、このような流れを生み出すようなカリキュラム・マネジメントや単元づくりが必要であると考えた。子どもが「in」「about」の学びを繰り返し、地域の人・もの・ことに愛着をもつ姿を、本研究では「推し」をもつ姿、自分が「推す」人・もの・こと等を自覚している姿であるととらえている。なぜなら、自分が愛着をもつ対象を自覚していることが、「for」に向かうきっかけになると考えているからである。

「推し」については、先行研究によって定義がなされている。例えば、田島（2022）は、「自身が愛好し応援する対象のこと」（p.87）、原田ら（2023）は、「特定の人物に対して情熱をささげて応援したいと思い、強い愛情と行動を示すこと」（p.2）、長谷川・福崎（2023）は、「自身が没頭して応援する対象のこと」（p.29）と定義している。また、「推す」については、植田（2019）は「推す」行為について、「単に『好きになる』『ファンになる』だけではなく、『感情移入する』ことに相当する」（p.133）と述べている。このように、地域の人・もの・ことに対する熱き思いをもつことにつながるような取組を実践していきたいと考えた。

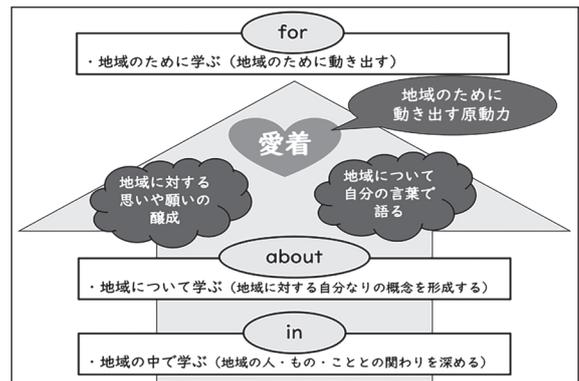


図1 地域のために動き出す姿を生み出す流れ（木村、2009、pp.144-146）（藤上、2008、p.92）をもとに作成

2. 研究の方法

本研究においては、「①先行研究・先進実践をもとに、未来を拓くために必要な資質・能力を具体化する」「②単元前後、各授業後の子どもたちの地域に対する概念の変容と課題解決に必要な資質・能力の獲得の状況をとらえる調査方法を開発する」「③これまでの経験を活かした地域への愛着をより深めていく単元を開発する」「④概念と方略の獲得に関わるアンケートを用い、子どもたちがどのように変容したのかについて把握する」の流れで研究を進めることとした。

3. 研究の実際

3-1 未来を拓くために必要な資質・能力の整理

未来を拓くために必要な資質・能力を整理する際に、現在の教育に影響力の大きい「OECDラーニングコンパス」で挙げられた資質・能力（図2を参照）や、教職員の研修を担う研修センターが整理した資質・能力（図3を参照）、OECD（2015）の社会的情動スキル（図4を参照）、『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総合的な学習の時間編』に掲載されている「考えるための技法」（図5を参照）を参考にした。ただ、図2と図4に挙げた資質・能力は抽象度が高く、授業にそのまま落とし込むことが難しく、図3と図5に挙げた資質・能力は授業レベルの資質・能力を整理したものであり、それらがどのような姿の育成につながるのかとらえにくいいため、これらの資質・能力の関係性を整理し、「未来を拓く」資質・能力として表1のように5つに整理し直し、それらの資質・能力それぞれについて授業レベルで具体化した。

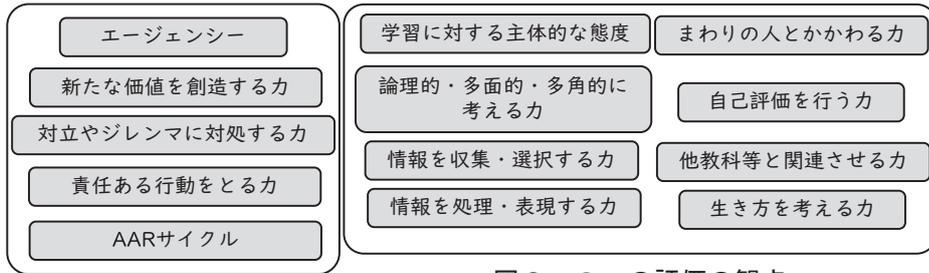


図2 2030年に求められる
コンピテンシー
(白井、2020、pp. 146-147)

図3 8つの評価の観点
(東京都教職員研修センター、2003、p. 173)

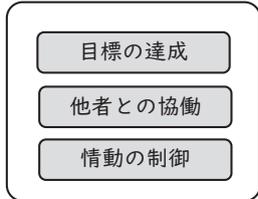


図4 OECD (2015) で示された
社会的情動スキル
(池迫・宮本・ベネッセ訳、2015、p. 13)

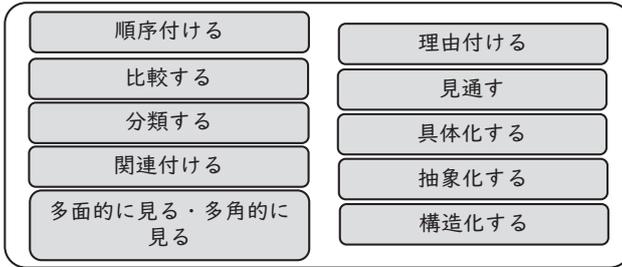


図5 考えるための技法
(文部科学省、2018、pp. 84-85)

表1 「未来を拓く」資質・能力

身に付けていく資質・能力	資質・能力の具体化	授業レベルで具体化
自分の身近な社会の中にある問題を見出すための「現実を把握する力」	変化に気付く	・何か変わった気がするよ
	問題に気付く	・あれがおかしいよ
	様々なことに興味をもつ	・〇〇が気になるな
自他の持ち味や役割を生かしながら協働することができる「コミュニケーション力」	共感する	・〇さんが言っていることは分かるな
	例える	・例えば… ・〇〇に例えると…
	折り合いをつける	・△に照らし合わせると、～の方がよさそうだ
協働して自分たちなりの「応え」を導き出すことができる「創造する力」	関連付ける	・□と○を関連付けると…
	キーワードでまとめる	・○と▲をまとめると◇と言えるね
	独自性のある考えをもつ	・～の特徴を生かすと… ・私たちがらしい方法にすると…
社会に通用する「応え」を創造するために必要な「多面的・多角的にみる力」	視点移動する	・～の視点から見ると…～という特徴があることが分かった ・〇さんの立場から捉えると…
	比較する	・○と△を、◇、▲、★という視点から比べると…
	分類する	・◇、▲、★の視点から比べると、●、■で分けられそうだね
困難が立ちはだかっても「～する」という意志をもって「壁を乗り越える力」	見通しをもつ	・あれが使いそう
	予測する	・あれになりそう
	段取りを考える	・この順番でやっていったら
	解決方法を見つける	・〇〇にするとよさそう

〔「考えるための技法」(文部科学省、2018、pp. 84-85)、

「質の高い協働で用いられる言葉」(藤上、2024、pp. 147-148) をもとに作成]

3-2 地域に対する概念の変容と課題解決に必要な資質・能力の獲得の状況をとらえる調査方法の開発

3-2-1 アンケート調査について

本研究では、単元前後、各授業後の子どもたちの山口市に対する思いや願い、概念の変容と資質・能力の獲得の状況をとらえる振り返りカードやアンケートを用い、各過程で行った手立てが、「未来を拓く」資質・能力の獲得や地域への愛着度を高めるために有効であったか分析した。アンケートは、総合的な学習の時間において育成される社会情動的スキルに関わる先行研究や社会参画に関わる研究等で用いられた項目を参考にして作成した。

3-2-2 「未来を拓く」資質・能力の獲得状況をとらえる質問紙調査について

「未来を拓く」資質・能力の獲得状況については、単元開始前（X年9月30日）、単元終了後（X年12月2日）に図6に示した質問項目に対して、5件法（5いつもそうだ、4たいていそうだ、3どちらともいえない、2たいていそうでない、1いつでもそうでない）を用いて、アンケートを行った。

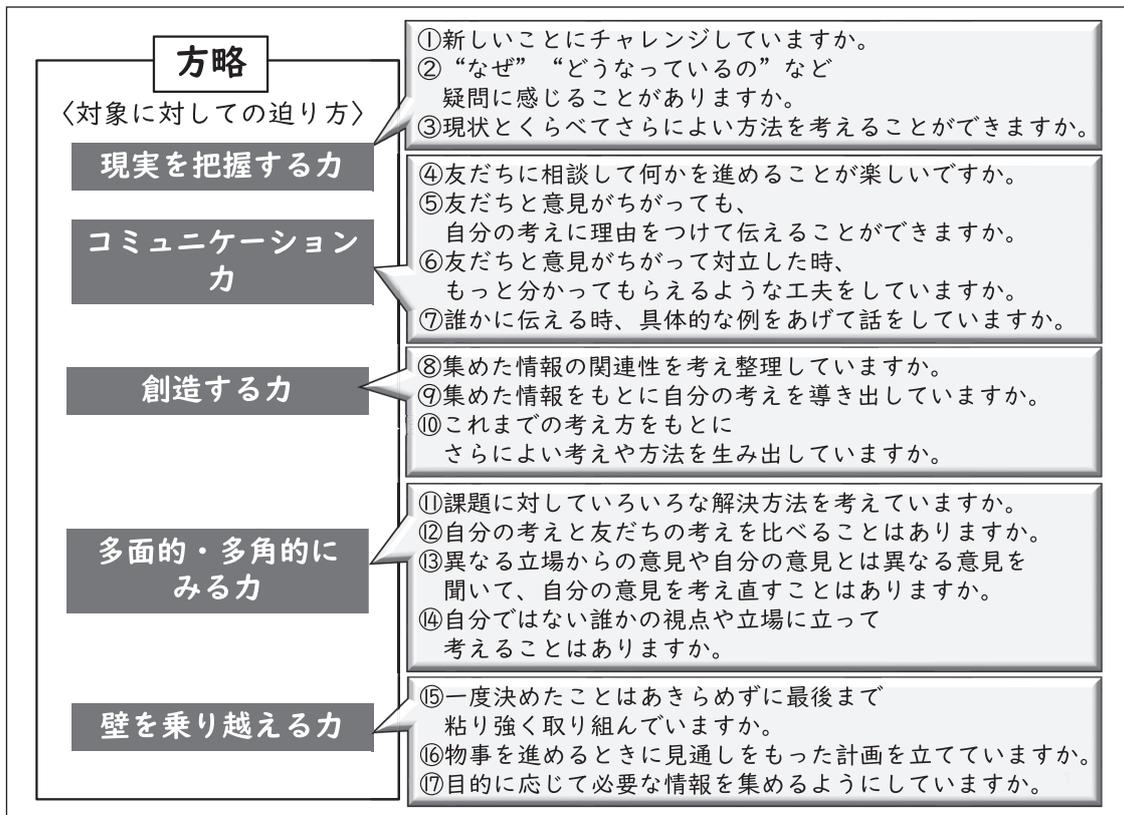


図6 「未来を拓く」資質・能力（方略）の獲得状況をとらえる質問項目

3-2-3 地域に対する概念の変容についてとらえる質問紙調査について

地域に対する概念の変容についても、単元開始前（X年9月30日）、単元終了後（X年12月2日）に表2の5件法及び自由記述法による回答を組み合わせた質問紙を用いてアンケートを実施した。

宮田・折出（2022）は、「地域参画の意思」は「特別活動で培う社会参画」により肯定的な影響を受けていることを明らかにしている（p. 159）。集団メンバーとの対話や協働できる児童生徒ほど、地域の人々と交流して地域の発展に参加しようとする社会参画の意思を高めていくことから、身に付けたい資質・能力の1つである「コミュニケーション力」を発揮することで、社会参画の意思が高められるのではないかと考えた。そこで、山口市のことがどれくらい好きなのか、山口市のために何かしてみたいと感じる度合いはどのくらいなのかを知るために、それらに関する質問項目は5件法で行い、それ以外の質問項目に関しては、子どもたちの自由な考えを知るために自由記述法でアンケートを作成した。

このアンケート項目を作成する際に参考としたのは、東京都教職員研修センター（2003）の総合的な学習の成果に関する調査研究である。東京都教職員研修センター（2003）は、東京都教職員研修センター（2002）の問題解決型の学習に必要な資質・能力として総合的な学習の時間における8つの評価の観点に整理したものの（p. 10）を用いて質問項目を作成している。この質問項目では、子どもたちの資質・能力の獲得に向け、授業の中でどのようなことを意識していたか、どのような力を発揮し、身に付いたと感じているか、把握しようとしている。本研究においても、「未来を拓く」ための資質・能力の獲得において子どもたちの変容を捉えることが必要であるため参考にした。また、下村ら（2005）は、総合的な学習の時間の学習効果の分析として質問項目を作成している（p. 18）。この研究においても、総合的な学習の時間における資質・能力を子どもたちが単元を通してどのくらい達成したと感じているのかについて明らかにするための質問項目を設定している。単元の前、途中、最後に子どもたちに対して資質・能力の獲得の自覚を促すためのアンケートの

方法や、「多面的・多角的にみる力」や「コミュニケーション力」に関わる質問項目もあるため参考にした。

表2 地域に対する概念の変容についてとらえる質問項目

[せつもん②] 山口市のことについて聞きます。1と8は5段階から、2、3、4、5、6、7、9は自分の言葉で書いてください。						
1	山口市が好きですか。	5	4	3	2	1
2	1の理由					
3	山口市のどこが好きですか。					
4	3の理由					
5	山口市に住んでいる人以外に山口市の中でおすすめしたいところがありますか。					
6	5の理由					
7	山口市のためにどのようなことをしたことがありますか。					
8	山口市のために何かしてみたいと思いますか。	5	4	3	2	1
9	今後、山口市のためにどのようなことをしてみたいですか。					

3-2-4 毎時間の振り返りについて

毎時間の振り返りは、本時の終わりの山口市に対する思いの程度を、図7のように0～100%で表し、そう判断した理由について自由記述式で問うた。毎時間の山口市に対する思いの変化を可視化することで、いつ、どのように変わっていったのかを自覚できるようにした。

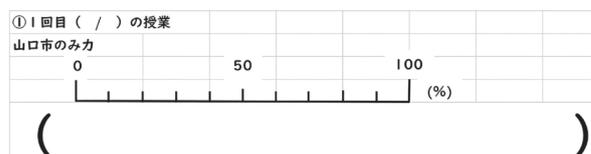


図7 毎時間の振り返り

3-3 地域への愛着をより深めていく単元「山口市推し活プロジェクト」(小学校第6学年)の開発

3-3-1 単元の目標

山口市がニューヨーク・タイムズ紙で3位になったことから、紹介した人と自分たちの山口市の捉え方の違いを考え、まだ知らない魅力があるかもしれないことに気づき、地域の人に話を聞いたり身近な場所に行き調べたりすることで山口市の魅力を再発見し、愛着をもつことができるようにする。

3-3-2 本単元までの子どもの実態

子どもたちは、第4学年の社会科で、山口県の特徴や魅力に迫ってきた。その中で、「県外の人に山口県の魅力を伝える」という目的で、山口県の特徴を捉えながら学習をし、地域住民の一員としての自覚をもち、ふるさとへの誇りと愛着を深めてきた。このような子どもたちが、身近な人や地域の方々から話を聞いたり、地域に魅力を見つけに行ったりすることで、今一度、山口市に目を向け、これまで気付かなかった魅力に気づき、さらに、地域の一員として社会に参画しようとする態度を養うことにつながると考えた。

3-3-3 単元計画

本単元は、小単元Ⅰ、Ⅱ、Ⅲで構成している。小単元Ⅰでは、子どもたちが、ニューヨーク・タイムズ紙で山口市について自分と紹介した人の山口市の捉え方の違いを感じ、自分たちにはまだ知らない魅力があるかもしれないということに気付くことをねらい、計4時間を設定した。小単元Ⅱでは、子どもたちが、山口市の魅力について身の回りの人に聞いたり学校周辺の観光名所に行ったりして情報を集め、その魅力についてまとめる活動として、計3時間を設定した。小単元Ⅲでは、子どもたちが、山口市の魅力を再発見し、それらを広めていく方法を考える活動として、計4時間を設定した。

3-4 授業実践

3-4-1 小単元Ⅰ：モドさんの視点から山口市を捉える

小単元Ⅰでは、ニューヨーク・タイムズ紙で山口市が3位になったという結果や、山口市を推薦したモドさんの言葉から、モド氏の感じる山口市の魅力について自分の思いや考えと比較しながら話し合う活動を通して、モド氏の視点に立って山口市の魅力について考えることができることを目標として授業を行った。

小単元Ⅰの主な手立ての1つめは、「モドさんの言葉の意味を推論する」場を設定し、「多面的・多角的にみる力」と「コミュニケーション力」の発揮を促し、モド氏の視点から山口市の魅力をとらえ、学び合う

仲間と伝え合うことができるようにした。

2つめの手立てとしては、山口市に対してモド氏が感じた魅力をキーワード化して表現する「モドさん脳内メーカー」を使って、モド氏が感じた魅力を自分なりにまとめる」場を設定し、「創造する力」の発揮を促していった。図8は子どもたちが、「モドさん脳内メーカー」を用いて、モド氏の視点から山口市の魅力をキーワード化したものである。

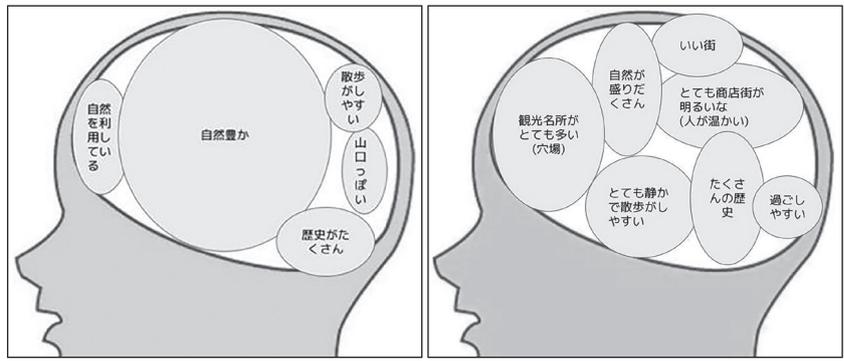


図8 「モドさん脳内メーカー」を用いてモド氏の視点から山口市の魅力をキーワード化したもの

3-4-2 小単元Ⅱ：自分の視点から瑠璃光寺の魅力を捉える

小単元Ⅱでは、今度は、自分の視点から瑠璃光寺の魅力を捉える場を設定した。小単元Ⅱの1つめの手立てとしては、電子黒板で図9を示しながら、これまでの学習ではどのような資質・能力を発揮していたか、本時ではどのような資質・能力を発揮するとよいかを考えるというように、課題解決に必要な資質・能力を意識する手立てを行った。

2つめの手立てとしては、「推し」の見つけ方について考える場を設定し、他市の観光地の2つの写真をもとに、見方によって感じ方が違うことに気付く「多面・多角的にみる力」、どのように「推し」を見つけていきたいかを考える「現実を把握する力」の発揮を促していった。

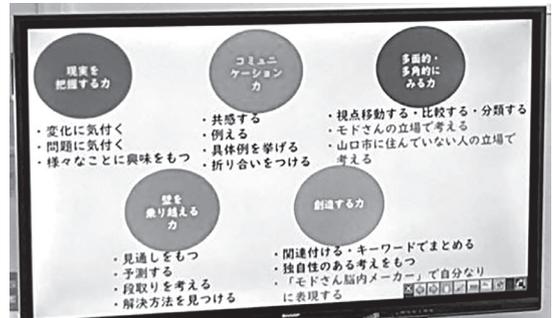


図9 子どもたちに提示した資質・能力

3つめの手立てとしては、実際に瑠璃光寺に探検に行き、

自分だけの「推し」を見つける活動を設定し、学校に帰って「推し」をグループで紹介する場を設定した。さらに、そこで語り尽くせなかった思いをもとに、伝え方や内容を再吟味し、「推し」をペアで紹介する場を設定し、「推し」の魅力を伝えるための方法や「推し」の魅力を伝えるためのさらに良い方法を考えるという「壁を乗り越える力」や、写真に題名を付けるという「創造する力」、相手の「推し」に共感するという「コミュニケーション力」の発揮を促していった。図10は、子どもたちが作成した表現物である。

<p style="text-align: center;">題名 窓を眺める君</p> 	<p style="text-align: center;">題名 あなたのハートを掴み取るわらべ地蔵</p> 
<p style="text-align: center;">こんなところが「推し」ポイント！</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="radio"/> 落ち着く <input type="radio"/> 窓から見る景色が綺麗 <input type="radio"/> 昔の良さがある <input type="radio"/> いろんな有名な人の写真があった <input type="radio"/> 静かで居心地がいい 	<p style="text-align: center;">こんなところが「推し」ポイント！</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="radio"/> 顔が丸くてすごく可愛い <input type="radio"/> ポーズが優しさと可愛さが溢れて最高！！ <input type="radio"/> この表情がいい！ <input type="radio"/>

図10 子どもたちが作成した表現物

3-4-3 小単元Ⅲ

小単元Ⅲでは、自分の視点から山口市の魅力を捉える場を設定した。山口市の自分だけの「推し」を見つけて紹介し合うとともに、みんなの見つけた山口市の「推し」についてまとめていった。

4. 考察

4-1 他者と共に課題に向き合うために必要な資質・能力の獲得状況をとらえる質問紙調査の結果について方略の獲得に関わるアンケート（図6を参照）において、数値が上昇した質問項目は③⑤⑧⑩⑬⑮⑰、下

降した質問項目は①②④⑦⑨⑪⑫⑭⑯、変化していない質問項目は⑧であった。その中でも、上昇した質問項目と下降した質問項目の上位2つについて考察を述べる。

上昇した質問項目の1つめは、「③現状と比べてさらに良い方法を考えることができますか。」という、「現実を把握する力」に関する質問項目である。授業で、伝える相手の気持ちの変容を考える活動を設定したことで上昇したと考えられる。グループで自分の「推し」を伝える時には、「推し」の魅力が伝わるように「推し」ポイントを伝えていたが、それだけでは相手の思い入れについて深く聞くことができていなかったため、より伝え合うことを意識できるようにするためにペアでの活動を取り入れた。相手にどのような気持ちになってほしいかを考えることで、伝える方法や内容を前回とは変えていたり、自分の「推し」を好きになってもらうために、相手の視点に立って自分なりの方法を考えたりしたことから上昇したと考える。

2つめは、「⑩これまでの考え方をと、さらによい考えや方法を考えていますか。」という「創造する力」に関わる質問項目である。小単元Ⅲにおいて、瑠璃光寺でどのようにして自分だけの「推し」を見つけたのかを振り返ることで、山口市ならどのように見つけるとよいか、自分なりに最適な方法を考える子どもが多くいた。このように、これまでの学習を振り返りながら自分なりの山口市の「推し」の見つけ方を考えていたことが要因となったのではないかと考える。

次に、数値が下がった質問項目の1つめは、「⑪課題に対して色々な解決方法を考えていますか。」という「多面的・多角的にみる力」に関わる質問項目である。授業の中で、普段とは違う視点で対象を見ることで新たな魅力を見出すことができることに気付いたり、実際に「推し」を見つけたりする活動を行った。また、山口市の「推し」をどのように見つけるとよいかという課題に対して、様々な視点から方法を考えていた。しかし、教師が提案した対象への迫り方や活動となったため、子どもたちが自ら課題を解決するための方法を考えた実感している子が少なかったと考える。

2つめは、「自分の考えと友だちの考えを比べることはありますか」という、これも「多面的・多角的にみる力」に関わる質問項目である。モド氏の考えに共感したか否かについてそれぞれの立場の考えを知る活動や、瑠璃光寺で見つけた自分だけの「推し」を共有することで、人によって「推し」や、「推し」の見つけ方の違いに気付いていくことができるようにした。その際、友だちの考えを知ることができたとか、人によって考え方が異なるという振り返りもあった。しかし、それぞれの考えや「推し」に対する思いを知ることができていたが、着眼点は子どもごとに異なるため、考えの比較にはつながらなかったと考える。

4-2 概念の変容をとらえるアンケートの結果について

概念の変容を捉えるアンケートについて、「①山口市のことが好きですか」という質問項目と、「⑧山口市のために何かしてみたいと思いますか」という質問項目に着目してその結果を考察する。①も⑧も1回目と2回目のアンケートでは、肯定的な回答をした子どもが増えており、一人ひとりの愛着度や社会参画の度合いの変容について、理由とともに分析することとした。アンケートを実施した33名の結果は、9つの傾向に分類できた。そこで、上がったたり下がったりした質問項目に着目し、子どもたちがどうしてそのように感じたのかについて考察することとした。

①も⑧も数値が上がった子どもは6人いた。その理由として、推し活プロジェクトを通して山口市に魅力を感じたことや、自身が見つけた「推し」を、市民に紹介したいという気持ちになっていることが挙げられた。これは、本単元において、山口市に住んでいながらも瑠璃光寺の五重塔以外の魅力について知らなかったことが多かったことから、同じ立場である山口市民に対して紹介することで、山口市をさらに好きになってほしいという気持ちになっているのではないかと考える。

①は上がり、⑧は下がった子どもは2人いた。アンケートの記述においても、1回目は「山口市といったらといういいものがないから」と、山口市に対して否定的な考えをもっていたが、小単元Ⅱにおいて、瑠璃光寺で自分だけの「推し」を見つけたり、紹介し合ったりしたことから山口市に対する愛着度が高まったと考える。しかし、地域参画の度合いが下がっていることから、愛着度は増している、それが地域参画の思いにつながらなかったと考える。

①は下がり、⑧は上がった子どもは1人いた。授業を通して瑠璃光寺の魅力に迫ったり山口市の「推し」の見つけ方を考えたりしたが、授業の中では自分自身の生活において感じている疑問の解決には至らなかったため、愛着度は高まらなかったと考える。また、瑠璃光寺の自分だけの「推し」を見つげに行くことで、毎授業で行った山口市に対する魅力接近度は高まっているが、瑠璃光寺の魅力を見つけただけで山口市の魅

力を見つけることはできていないため、50%に留まっていると考える。⑧の理由については、山口市をよくするためにボランティア活動を行うことだけでなく、本単元で学んだことを他者に伝えるという地域参画の方法を考えている。このことから、小単元Ⅱで行った「推し」を紹介する活動が①のみ上がった子どもは4人いた。その理由として、小単元Ⅰにおいて、山口市在住でない人の視点から見た山口市の魅力を、自分自身も感じているからではないかと考える。

⑧のみ上がった子どもは3人いた。その理由として、自分の見つけた「推し」と関連した自然を大切にしたいという思いが生まれているからではないかと考える。

①のみ下がった子どもは2人いた。その理由として、瑠璃光寺の「推し」を見つけ、伝え合うことで、山口市に対する魅力接近度は高まったが、山口市の魅力はそれだけなのだろうかと考え始めているからではないかと考える。

⑧のみ下がった子どもは7人いた。その理由として、山口市や瑠璃光寺の魅力を感じたが、山口市のためにどのようなことをしてみたいかを具体的に考えることにつながらなかったからではないかと考える。

①も⑧も下がった子どもは1人いた。その理由として、①の理由から、推し活をすることが山口市を好きという気持ちにはつながらなかったのではないかと考える。また、⑧については、県外の人へPRしたいという思いは、自分の見つけた「推し」を知ってもらうためにPRしたいと感じていると考えられるが、このアンケートだけではどうして数値が下がったのかを見取ることができなかった。しかし、瑠璃光寺で自分だけの推しスポットを作っていたり、それを紹介するプレゼンを自分なりにレイアウトして作っていたり等、推し活に対してとても意欲的な姿を見取ることができた。

①も⑧も変わらなかった子どもは7人いた。その理由として、もともともっていた山口市に対する思いの度合いや概念には一人ひとりに差があることに加え、愛着は長期間をかけて育まれるからではないかと考える。そのため、めざす子どもを具現化するためには、長期にわたって「in・about」の段階の学びを積み重ねていく必要があると実感した。

4-3 山口市の魅力接近度をとらえる毎時間の振り返りの結果について

ここでは、山口市の魅力接近度をとらえる毎時間の振り返りの結果について述べていく。概念の変容を捉えるアンケートにおいて、「山口市が好きですか。」という質問項目で、愛着度の高まりが大きかった子ども、愛着度が低くなった子ども、変わらなかった子どもの魅力接近度について考察する。

まず、愛着度の高まりが大きかった子どもについて述べる。この子どもは1回目のアンケートにおいて山口市への愛着度は2であったが、2回目のアンケートでは5まで上昇した。毎時間の魅力接近度は、最初の授業時点では40%とやや低かった。しかし、2回目の授業では、モド氏の視点から山口市の魅力に迫ることで60%に上昇した。そこから、瑠璃光寺で推しを見つけたり紹介し合ったりする活動を通して100%に到達したが、小単元Ⅲの1時間目の授業後には80%に減少した。これは、山口市の「推し」をどのように見つけたらよいかを考える活動であったため、他にも「推し」があると感じているからであると考えられる。

次に、愛着度が低くなった子どもについて考察する。この子どもは、1回目のアンケートでは山口市への愛着度が3だったが、2回目のアンケートでは2になっており、低くなった。毎時間の授業の魅力接近度の振り返りについては、最初の授業では20%と低く、山口市には魅力はないと感じていた。2回目の授業ではモド氏の思いを聞いたり、「モドさん脳内メーカー」や山口市のバランスを考えたりすることで40%に上昇した。瑠璃光寺に「推し」を見つけに行った際には、自分で「推し」スポットを見つけたり、地域の方に話を聞いたりする姿も見られ、魅力接近度も50%になった。しかし、小単元Ⅲの1時間目の授業後の魅力接近度は、50%と変化はない。これは、瑠璃光寺以外にも「推し」を見つけてみたいという気持ちが芽生えており、山口市の魅力を見つけることに意欲的になっているのではないかと考えた。また、アンケートでの山口市への愛着度の理由は、1回目と2回目で書いていることが同じであった。このことから、魅力接近度は高まっているにもかかわらず、瑠璃光寺で見つけた自分だけの「推し」以外にも山口市には推せる場所があるのではないかと感じていることから、愛着度が低くなっているのではないかと考えた。

最後に、愛着度の変化がなかった子どもについて考察する。この子どもは、山口市の愛着度を1回目も2回目も5としている。魅力接近度については、最初の授業では、愛着度の理由と同じように、人々のやさしさを感じていることから100%にしていた。3回目の授業では、モド氏の視点から山口市の魅力について推論したが、自分の感じている魅力とは異なったことで、80%に減少しているのではないかと考えた。5回目

の授業では、錦帯橋を例に「推し」の見つけ方を考えたことは、山口市の魅力に迫ったわけではないため、10%に大幅に減少した。その後は、瑠璃光寺で穴場となる「推し」を見つけたことから95%に上昇していたが、小単元Ⅲの1時間目の授業では、90%に減少した。これは、残りの10%は山口市の他の魅力を指しているため、90%に留まった。このように、魅力接近度が最初と最後に減少したが、子どもなりにどうしてそのようになったのかを自覚していることから、愛着度も変化がなかったのではないかと考えた。

5. 成果と課題

5-1 本研究における成果

本研究における成果は、主に2点ある。

1点めは、子どもたちの対象をとらえる視点、思考・判断の過程や結果を顕在化した上で話し合う手立てを行ったことである。小単元Ⅰにおいて、モド氏の感じた山口市の魅力をとらえるために、モド氏の思いや考えを推論しながら「モドさん脳内メーカー」を作成したことは、自分ではない他者の視点から見た山口市の魅力をとらえることにつながったと考える。また、小単元Ⅲにおいて、どのように山口市の「推し」を見つけるとよいかを考えたことは、瑠璃光寺でどのように「推し」を見つけたのかを振り返りながら自分なりの方法を見出すことができていた。

2点めは、自身が創出した概念や山口市の魅力への接近度を自覚させる振り返りを行ったことである。山口市の魅力をどれくらい感じたのか、毎授業後に振り返ることで、授業をするごとに自分の愛着度が変化していることや、どこでその度合いが大きく変化したのかを見えるようにした。また、その際、理由も書くことで、自身の山口市に対する思いの変化もとらえることができるようにした。これらのことから、自他の興味・関心、見方や感じ方の傾向を把握し合うことにつながり、多くの他者の視点から地域の魅力を見出すことにつながったと感じている。

5-2 本研究における課題

本研究における課題は、主に2点ある。

1点めは、資質・能力の共有の仕方についてである。向き合う対象に応じてそれらを選択して活用する子どもの姿を見出すためには、抽象度の高い資質・能力を実際の授業で活用する具体的なレベルでどのように子どもたちと共有するかを考える必要があると感じている。単元の前でアンケートの結果が上昇したものと、そうでないものがあつたため、授業内で子どもたちに意識させることで、より資質・能力の発揮について自覚できたのではないかと考える。その方法として、例えば、資質・能力をどこでどのように発揮したのかを小単元ごとに振り返ったり、自分たちなりの言葉で具体化したりすることができるようになると、より自分の発揮した資質・能力を自覚することができるのではないかと考える。

2点めは、推し活において、協働する必要感をもつ手立てが不足していたことである。推し活により、一人ひとりの見方・考え方、感じ方の違いが顕在化されたことは効果的であったが、自分の世界を充実させていく推し活は個別具体的に展開されるものであり、それをもとにどのような概念を学級全体で導き出していくべきか検討すべきであったと考える。

おわりに

本研究では、地域への愛着を深める子どもの育成をねらって、主に地域に関わる概念を再構築していく単元を開発していった。学校実習校のカリキュラムの中に、特設的に差し込んだ単元であるが、中学校に進学した後も、本単元での学びが、ふるさと山口市に対する愛着を深め、山口市のために動き出す子どもの姿につながっていくことを期待したい。

付記

本論文の内容は、山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻の令和6年度実践研究報告書にある実践事例分析を抜粋し、付加・修正を加えたものである。本論文は、藤上真弓と久保田大貴の指導のもとで授

業実践、協議したことを整理して黒瀬由姫香が執筆した。

参考文献・引用文献

- 池迫浩子・宮本晃司・ベネッセ教育研究所訳：家庭、学校、地域社会における社会的情動的スキルの育成 国際エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に関する示唆，OECD，日本語版 Fostering Social and Emotional Skills Through Families, Schools and Communities, p.13, 2015.
https://benesse.jp/berd/feature/focus/11-OECD/pdf/FSaES_20150827.pdf (2025. 9. 15 確認)
- 植田康孝：アイドル・エンタテインメント概説 (3) ～アイドルを「推す」「担」行為に見る「ファンダム」～，江戸川大学紀要第 29 巻，p. 133, 2019.
- 木村吉彦：小中連携と「学びの In・About・For」，高階玲治編，幼・小・中・高の連携・一貫教育の展開，教育開発研究所，pp14-146, 2009.
- 下村勉・小山史己・白井靖敏・鷲尾敦・須曾野仁志・落合英次：「総合的な学習の時間」の学習効果の分析，三重大学教育実践総合センター紀要第 25 号，p. 18, 2005.
- 白井俊：OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来：エージェンシー、資質・能力とカリキュラム，ミネルヴァ書房，pp.146-147, 2020.
- 田島悠来：メディアが描く「推し活」ーメディア報道と表象の分析からー，帝京大学文学部社会学科紀要第 35 号，p. 87, 2022.
- 東京都教職員研修センター：教員研修の評価に関する研究，東京都教職員研修センター紀要第 2 号，p. 10, 2002.
https://www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.lg.jp/09seika/reports/files/bulletin/h14/h14_01_04.pdf (2025. 9. 15 確認)
- 東京都教職員研修センター：総合的な学習の時間の成果に関する調査研究，東京都教職員研修センター紀要第 3 号，p. 173, 2003.
https://www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.lg.jp/09seika/reports/files/bulletin/h15/h15_08.pdf (2025. 1. 20 確認)
- 奈須正裕：教科の本質を見据えたコンピテンシー・ベースの授業づくりガイドブック -資質・能力を育成する 15 の実践プラン-，明治図書，p. 22, 2017.
- 長谷川千晴・福崎俊貴：人はなぜ推しを推すのか？ーナラティブからみる推しの存在理由とその機能ー，鳥取大学研究紀要第 16 巻，p. 29, 2023.
- 原田祐里花・小松優衣・加納里梨・吉村耕：「推し」活動が人の健康に及ぼす影響，山口県立大学看護栄養学部紀要第 16 巻，p. 2, 2023.
- 藤上真弓：『しおさい』（総合的な学習の時間）「自分なりの応え」をもとに語り合う活動を通して、言語活動の充実を図る，言語活動の充実を図る「視点と方法」のある授業～とらえかたツールで授業を変える～』，山口大学教育学部附属光小学校，明治図書，p. 92, 2008.
- 藤上真弓：総合的な学習の時間における質の高い協働で用いられる言葉の具体化～分かり合おうとするために必要な言葉に着目して～，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第 57 号，pp. 147-149, 2024.
- 宮田延実・折出健二：特別活動で培う「社会参画」が地域参画を促進する効果ー総合的な学習の時間における地域活動を体験した子どもを対象にしてー，愛知教育大学研究報告教育科学編第 71 巻，p. 159, 2022.
- 文部科学省：小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総合的な学習の時間編，東洋館出版社，pp. 84-85, 2018.
- 文部科学省・国立教育政策研究所：「令和 6 年度全国学力・学習状況調査の結果（概要）」，p. 46, 2024.
<https://www.nier.go.jp/24chousakekkahoukoku/report/data/24summary.pdf> (2024. 11. 29 確認)
- OECD：Fostering Social and Emotional Skills Through Families, Schools and Communities, 2015.
https://www.oecd.org/content/dam/oecd/en/publications/reports/2015/06/fostering-social-and-emotional-skills-through-families-schools-and-communities_g17a266d/5js07529lwf0-en.pdf (2025. 9. 15 確認)